



TITLE:

<書評>菅原和孝著『狩り狩られる
経験の現象学 - ブッシュマンの感
応と変身』 京都大学学術出版会、
2015 年、4,600円＋税、524頁

AUTHOR(S):

奥野, 克巳

CITATION:

奥野, 克巳. <書評>菅原和孝著『狩り狩られる経験の現象学 - ブッシュマンの感応と変身』 京都大学学術出版会、2015 年、4,600円＋税、524頁. コンタクト・ゾーン 2016, 8(2015): 113-122

ISSUE DATE:

2016-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/217885>

RIGHT:

菅原和孝著

『狩り狩られる経験の現象学 ——ブッシュマンの感応と変身』

京都大学学術出版会、2015 年、4,600 円＋税、524 頁

奥野克巳

2015 年 3 月の時点での本書の刊行は、人間と動物の関係をめぐる人類学の研究グループを組織している評者と評者の共同研究者にとっては途轍もない衝撃であった。本書のなかに、文化人類学が動物を含めた課題に向き合うためのアイデアやヒントが、あちこちに詰め込まれていたからである。凡そ、人間と動物の関係や動物殺しというテーマに取り組む文化人類学者ならば、本書を素通りすることなどできまい。以下では、本書の内容を章ごとに紹介し、その後に、コメントを述べたい。

歩き出す前に——緒言にかえて

プロローグ

序 章 魅惑と境界——論理構成・方法論・問題系

一 語りの「現象学的な民族誌」へ向けて——旅程と構成

二 方法論と基本概念

三 人間／動物関係——概念空間の成立

四 境界の攪乱へ向けて

第一章 始原の物語——グイの創世神話

一 思想と物語

二 世界の始まりと猟獣たちの創造

三 火の起源

四 性交の起源

五 進化という暗函——私たちにとっての「始原の物語」

第二章 気づきと感応——他者としての動物

一 記号と差異

二 動物をおもしろがる

三 捕食者の技と知性——虚環境と制度化

四 間身体的な感応

- 第三章 食うと病むもの——肉食の禁忌と忌避
 - 一 「食うと病むもの」を食ったら——最初の遭遇
 - 二 ヒョウの匂いで死ぬ——民俗免疫理論との遭遇
 - 三 動物をいかに分類するのか
 - 四 肉食の禁忌と忌避
 - 五 食わない理由
 - 六 規範との交渉——経験の連続性
 - 七 民俗免疫理論——身体化された思想
- 第四章 翼ある告知者——環境と虚環境の双発的生成
 - 一 民族鳥類学事始め——バード・ウォッチングからの接近
 - 二 注視と呼びかけ
 - 三 言語へのなぞらえとお告げ
 - 四 神話のなかを飛ぶ鳥たち
 - 五 環境と虚環境の双発的な生成
- 第五章 殺しのパッション——狩る経験の現象学
 - 一 殺意の装置——罠と矢
 - 二 狩猟の情動シナリオ
 - 三 狩猟経験の構造
 - 四 異なる殺し方——槍突きと焼殺
- 第六章 搔かれ咬まれ殺される——パーホ（咬むもの）の恐怖
 - 一 穴を掘る「皮」——ツチブタの脅威
 - 二 ヒョウに襲われる——失望のシナリオ
 - 三 ライオンに殺される
 - 四 ライオンとの遭遇を生き延びる
- 第七章 女の魔力と動物への変身——〈キマ〉をめぐる省察
 - 一 〈キマ〉との出会い
 - 二 キマと呪詛はどう違うのか
 - 三 発狂と変身
 - 四 不可視の作用主はいかに立ち現われるのか
- 終章 動物的実存への還帰——現象学的自然主義への途
 - 一 間身体的な動機づけ
 - 二 境界は攪乱されたか——「静かな革命」をめぐって
 - 三 動物に《なる》こと
 - 四 自然誌的態度としての自然主義
- エピローグ
- 歩き終えた地点から——あとがきにかえて

著者は、「歩きだす前に——緒言にかえて」で、人文系の「人間／動物関係」をめぐ

る今日の議論に触れながら、「人類学の側からこれらの動向を眺めると歯がゆさを抑えることができない。現実生きる動物と直接関わる経験と無縁なところで人間／動物関係について論じることには、根本的な空しさがある」(2頁：以下、本書からの引用は数字のみ示す)と述べた上で、「人間と動物の関わりを真に根源的に問い直す途は、身体として直接的に野生動物に関わることを生の基盤におく狩猟民の経験世界に深く没入することから切り拓かれるだろう」(2-3)という見通しを示している。本書は、1982年から30年以上にわたって続けられた、南部アフリカに住むグイ・ブッシュマンの調査のなかで得られた、とりわけ、談話資料を徹底的に分析することによって書きあげられた民族誌である。

「序章 魅惑と境界——論理構成・方法論・問題系」で、著者は、原野を歩きまわり動物を殺すことこそが本書の探究の基底を流れる実践であると言う。人々の〈語り〉には、動物に向けられる説明、解釈、想像、行為の詳細が溢れており、それらをありのままに呈示することが肝要である。「グイは、わくわくし、驚き、困惑し、失望し、哄笑し、憤激し、気味悪がり、恐れおののく。これらの情動のダイナミズムを追体験することへのもっとも有力な手掛かりは、直接話法による自分や他者のことば(しばしば独白や内言の形をとる)の再現、間投詞、反復、冗長性といった発話の修辭的特徴に求められる」(18)。

著者は、グイの男性・タブーカと原野を共に歩く経験から始める。タブーカは「今ここ」にはいない動物たちを〈思い浮かべ〉る。今この環境において直接知覚する事柄に基づいて事象を同一性指定することを、〈直示的認知〉と呼ぶ。彼が切り結ぶ環境とは、この環境とは異なるヴァーチャルな領野、すなわち〈虚環境〉である。典型的な虚環境とは、動物や人間たちが闊歩する神話空間である。人々は、今ここから見える風景の一点を指し示し、「あのぐらゐの所に(中略)」と言いながら、虚環境における自分と獲物とのあいだの距離感を再現する。

本書では、著者の直接的経験に還帰し、それとグイの経験とのあいだに発見される連続性と断絶を記述することが目指される。私と他者は共通のサンス(意味=感覚=方向性)へと開かれており、サンスの共有が「間身体性」である。この間身体性こそが、グイの社会生活に張りめぐらされている感応の回路を理解する上での鍵となる。

著者は、私たちが動物と関わる時、境界によって分断されると見る。獣害を受けた山村の農夫であるわたしが、「イノシシなんて根絶してしまえ!」と叫ぶことに野生動物保護者は共感しない。「狩猟民と動物との濃密な関わりを「示す」ことは、人類学者と一般市民とのあいだの境界をますます固定化する。あるいは狩猟民の経験世界において人間と動物との境界は容易に揺らぐと明言したとたん、周辺に生きる「かれら」は産業社会に生きる「私たち」から分断され、「アニミズム」的に前近代へと疎外される。この矛盾と対峙することこそ、本書のモチーフをなす」(57)と述べる。

続いて、著者は、人間と動物の分割線を乗り越えようとする今日の議論を俯瞰した後、伊谷純一郎に触れ、「動物それ自体の存在とともに、動物をこよなくおもしろがる人びとに魅了される——これこそ私たちが継承せねばならない自然誌的態度なのである」

(76)と言う。自然に埋没して魂を揺さぶられながら、経験のあり方を真正面から取り上げる民族誌が目指されなければならないのである。

「第一章 始原の物語——グイの創世神話」では、「世界はなぜこのようなか？」への答としての神話が扱われる。グイの物語を記述した後、著者は思い巡らす。他者の世界で始原の物語を聞き、特有の情動反応にまきこまれながら民族誌を書く一方で、観察可能な時間を超えた外在的な説明体系である進化論を有意ではないと考えるが、「世界はなぜこのようなか？」という問いに関わり、他者の生活世界が動物と関わるのであれば、他者の始原の物語と動物進化の学の双方に真剣に関心を注ぐべきであると。

「第二章 気づきと感応——他者としての動物」は、動物たちとグイの間身体的なサンスをめぐる章である。結び合わされた草の束は、人間の意図的行為が介在所有権を主張する〈しるし〉としてコード化されている。自然のなかに置かれた「差異」があり、動物にとってもまたこの世界は差異で充満している。

グイは、動物たちの振る舞いを面白がる。「私たちは、人間からきわめて縁遠い多足類とコミュニケーションをもつ可能性などはなから思いつきさえしない。だが、グイはこうした動物に対してさえ、コミュニケーション期待を投げかけているのだ」(128)と分析する。1950年代に、弾があたって跳び、脚を蹴りあげた獲物の苦悶を見て笑い転げたサン・ブッシュマンを見て、米国財閥マーシャル・ファミリーの探検隊の一員であったエリザベス・マーシャル・トーマスは、「こうした同情の欠如した反応は、サンの文化が動物への情動的な同一化を欠いていることの表れ」(123)だと記述した。これに対し、著者は「動物のふるまいが人間の予想を超えた複雑性に満ちているからこそ、人間の身体は笑いに揺さぶられる」(124-125)と、その間身体的なサンスを評価する。

その後、〈ズィウ〉が取り上げられる。尋常ではない出来事の体験からしばらくして、だれかの死の知らせがもたらされ、あの出来事こそ「〈ズィウ〉をおれ(私)に告げていたのだ」(144)とわかる。頻繁に出会う〈ズィウ〉とは、動物に生じる異変である。「動物という環境は容易には縮減しがたい複雑性のなかで揺らぎ続けているからこそ、汲めどもつきない「異様さ」が発生し、それがおれの思いをかり立て続ける」(151)。そのような思い籠めが立ち会わなかった死に投射され、死のお告げだったと解釈することは、変事を多少なりとも条理とする想像力の苦悶なのだと、著者は言う。

「第三章 食うと病むもの——肉食の禁忌と忌避」では、身体の制度化の典型である、肉食禁忌が取り上げられる。〈ショモ〉とは、「食うと病むもの」のことである。グイの会話から、「わたしたちが生きる世界は最初から間身体性に満たされている場である」(165)ことが浮かびあがる。身体は皮膚によって分離されるのではなく、濃密な関わり合いのなかで感応し合い、影響を及ぼし合う。

ある男が、グイの女性・ホエガエの愛人である男にヒョウの皮なめしをさせるのと引き換えに、トウモロコシ粉を与えた。ホエガエの愛人は皮なめしをした手でトウモロコシ粉を持参し、ホエガエがそれを粥にして食べたところ、「ヒョウの匂い」が入って病死したという。なぜ彼女はヒョウの匂いで死んだのか。著者は言う。「ヒョウこそ、女が体内に入れてはならないもっとも危険な動物である」。危険な動物の匂いに感応し、その影響関係のもとに病み死ぬというのが、グイの経験なのである。

著者はまた、年長者だけで〈ショモ〉を食いきれないときには、年下の親族または姻族

の下腹に傷をつけ薬を塗って、一時的に禁忌を解除する「ご都合主義」を見出す。さらに、タフな神経をもっているものと思いきや、優れたハンターが、太ったジャッカル乳房から雌犬を連想し、気持ち悪くなって吐いた述懐を聞いたとき、著者は彼とのあいだに、経験の連続性を再発見する。

本章の最後に取り上げられるのが、民俗免疫理論である。グイの老人カエカエが彼の息子であるシェーホーたちに施した種痘のロジックは、ヒョウの匂いのために衰えたホエガエの喝血治療後の呪医の託宣のなかにあった。それは、ライオンの皮を頭のそばで燃やして灰を鼻の穴につけることと相同関係にある。種痘予防は、「人間／動物／物質性を貫く身体の連続性を鋭敏に感知する特有のセンスから必然的に帰結する」(222)。著者は、動物と人間の密なる関係から生まれる技法に刮目する。

「第四章 翼のある告知者——環境と虚環境の双発的生成」の主題は、グイの民族鳥類学である。鳥の姿形や色彩は人間社会の様々な事柄と結び付けられ、鳥たちの形態、色彩、習性に注目し、それらを人間と関連する事象にみたと、お告げとして受け止めることこそ、コミュニケーションの原初形態としての思い籠めにはかならない。

神話は、今ここに虚環境を現出させ、哄笑の渦を起こす。その愉悅を表裏一体のものとして「同一性指定」が進行する。同一性指定できない呼び起こしの力でわたしたちの受動的な記憶に光が当てられ、情動が揺り動かされる。「原野を歩きまわり、鳥の声に耳をすまし、鳥の飛ぶ姿に目をこらすことによって練磨され神秘的な想像力は凡百の二元論を跨ぎこす」(276) のである。環境への注意が虚環境を豊かにし、逆に虚環境に魅惑されることで、環境内事象に新たに気づく。「このとき環境と虚環境は双発的に生成している」(276)。鋭い棘を踏んだダチョウの受難という神話の虚環境は、リアルなダチョウの足に気づく力を私たちに与えるのだと、著者は結ぶ。

「第五章 殺しのパッション——狩る経験の現象学」では、主に、狩猟経験が扱われる。グイの狩猟は単独でなされることが多いが、獲物の解体や運搬、肉の分配という実践を通して、社会的次元において共同体に接続する。

性交に夢中になって正気を失った、牡牝のスティーンポックが向かって来て、びっくりして狩人たちが叫ぶと、その只中に突進してきたという。その事態こそ、狩人と獲物の関わりの本質を照らし出す。「おやまあ、しのびよって射られたらなあ」という内言は、自らは顕示的なコミュニケーションを避けて、情報意図は聞き手に理解されるだろうという期待だけを投げかけていると、著者は解釈する。

エランドを射かけたままキャンプに戻り、苦い球根の汁を飲んだ翌朝、人々は追跡に参加し、女たちを連れて行って、解体して干し肉をかついで帰った。狩人の苦い汁の飲用という小さな禁欲によって、エランドが元気を盛り返す懸念に対処したことに著者は注目する。続いて、グイの狩猟経験の社会的次元の本質を照らすものとして、婉曲話法が取り上げられる。狩人は仲間の「S期待（実質的期待）」を予測する。獲物に命中させたおれは「C期待（コミュニケーションに関わる期待）」を〈減衰装置〉に委ねて、仲間のS期待の増幅を抑止する。逆に仲間たちの思い籠めの結果、自発的な協働へと動機づけられ、おれのS期待をかなえることを望む。そこには、C期待、S期待という期待から距離を取

うとする態度がある。カラハリに生きる世界—内—存在を彩る一般的態度とは「がっかり」への耐性を育むことであり、婉曲話法は〈期待の遮断〉であると言う。

次に、火を用いた動物の「罾り殺し」が取り上げられる。「矢毒は、10～20時間にわたって徐々に効力を発揮し、獲物を緩慢な死に追いやる。その間に獲物が経験する塗炭の苦しみを想像するならば、焼き殺すことが特段に残虐な殺害方法とは言い切れなくなる」

(327)。毒矢にせよ、撥ね罾にせよ、狡知を凝らした道具を使うことは、非力なヒトが自分よりずっと力強い他者を、技術を用いて打ち倒すという、フェアな闘いのイメージを喚起する。他方で、火は、人間を超えた荒ぶる力を鎮め、制御することに関わる。「だからこそわたしは動物を焼き殺すという「論理」の運用法に空恐ろしい傲慢さを嗅ぎつけた」

(328) のである。「わたしが感じるむごたらしさとは、生活世界の深部において、動物と関わり続けることからけっして免れえない、世界—内—存在としての「わたし」の思想に対して突きつけられる問いである」(332) と述べて、動物殺しの手法をめぐる私たちの思い込みに著者は深く切り込む。

この章の考察は、最後に、著者自身による車で動物の轢き殺しをめぐる考察へと向かう。「自動車という鋼鉄の塊が秘めている理不尽な暴力性。それと対照的な、動物身体の驚くべき脆さ。車の端っこにこつんと当たっただけで壊れてしまった。動物であれ人間であれ、内臓をしっかりと体内に収め、生き動いていること自体が奇蹟である。肉を食うために自分の手を血まみれにして動物身体を切り開き内臓を取り出すことに、わたしは恐怖を感じない。だが物体の質量と運動が偶発的に脆い身体を壊滅させたことに慄然とした」

(333-334) と、著者は問いを反復する。

「第六章 搔かれ咬まれ殺される——パーホ（咬むもの）の恐怖」では、動物に殺されることもある、人間の被傷性が取り上げられる。「パーホ」の脅威に直面することは、仲間を〈助ける／見捨てる〉という選択を突きつける。改めて気づかされるのは、カラハリの原野では、人間もまた狩られる存在であるという点である。凶暴な他者であるライオンが侵入し、イエのなかにまで、その不気味な鼻づらを突っ込んでくる。そうした物理に対して、女が男を「ツォイ（呪詛）」することで、男は命を失いかねない危険を孕んでいるという、呪術の問題が取り上げられる。

グイは、朝、ライオンの吠え声で目が覚めると、肉の横取りをするために声のほうに走っていく。しかし、小さな仔連れの牝が向かってくる気配を察知すると、人間は宥め声をあげる。陽光のもとでライオンと向かいあうとき、ヒトには、ライオンの動きに応じて自身の振る舞いを調整する余地が残されていて、人間はライオンにコミュニケーション期待を投げかける。ヒトは果敢にライオンと駆け引きを演じ、ときに獲物を横領する。ライオンはその意図がまったく測り知れない怪物ではない。恐怖に震えながらも、グイは最後まで闘おうとする。「いっしょにわれわれは造られたのだからやつを怖れるなんてできない」というグイの言葉には、自らの生に対する肯定感が漲っていると、著者は言う。

「第七章 女の魔力と動物への変身——〈キマ〉をめぐる省察」では、〈キマ〉という概念が取り上げられる。呪詛が女の口から発せられると、ほどなく現実化する。「女」に関わるこの力は、パーホが男を襲うという形で現実化する。呪詛が女の言語行為によって即

効的結果をもたらすのに対して、キマの効果は長い時間をかけて現れる。キマはまた、〈ショモ〉のタブーとも関連する。禁忌を破った者が狂気の発作に襲われ、禁じられている動物に取り憑かれることのなかに「キマがある」。こうした分析の先に、「グイとの会話のなかでわたし自身がキマという語を自然に使用できるようになること」(421)こそが、到達目標だと著者は述べる。

「終章 動物的実存への還帰——現象学的自然主義への途」では、最初に全体がまとめられる。狩人は、原野を歩きながら指標的記号と徴候とに注意を向ける。その走査線の密度を高めるには、情報の冗長性を高めなければならない。この冗長性が、狩人の知っている平常態としての「地」を安定させるからこそ、動物の異様さが「図」として浮びあがる。狩人は言葉を持たぬ動物にコミュニケーション期待を投げかける。動物のふるまいを笑い、それを不気味に感じることは、獲物の足跡に注意することと同様、その環境を生きることから促された情動的な活動である。仲間が禁忌を侵犯することが、おれの身体の変容をまねく。こうした感応の回路は、人間と動物、動物と動物、動物とモノのあいだの影響関係へと広がる。グイの女は呪詛によって、原野の猛獣たちを男へと差し向ける。男の目から見れば、女と動物のあいだにはコミュニケーションの回路が成立している。

続いて、著者は、「人類学の静かな革命」を検討する。「「世界はなぜこのようなのか」を解き明かす始原の物語こそが存在論の名にもっともふさわしい」(444)、「「真に存在するものは何か？」を明らかにする存在論こそ、哲学の野望である」(445-446)。動物が人間のあいだに境界をつくりだす契機となり、グイと動物の関係を描きだすことが、産業社会に生きる市民と狩猟民との境界を固定化する。本書でこれらの矛盾が乗り越えられたとは断言できずに、著者は「しどろもどろ」になる。「しどろもどろであり続けることのほうが、新しい道ひらき（革命ではないにしても）に接近しているのではなからうか」(449)。だから、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロのように、ジャガーと命がけで格闘する極限的なまでに情動的な経験に身を沿わせる長いフィールドワークの過程をすっとなげきジャガーのパースペクティブを語ることに、根本的な空しさを感じるのだと言う。

最後に、著者は、伊谷青年の見ていた世界に還帰する。「この青年に取り憑いていた妄執というべき確信は、動物の社会には構造があり、自らの「ないうこと」すべてを傾注すれば、その構造に接近できるということであった」(464)。「いわば彼は人間と動物のあいだの境界を走り続けていたのである」(466)。「多くの人類学者の用法に抗して、わたしは伊谷が体現していたような自然誌へのコミットメントを新しい意味での自然主義と呼ぶ」(446-447)。「認識の徒（思考の専門家）としての人類学者がなすべきことは、人間社会の記述を自然誌化することであり、それと同時に、動物社会の記述を「哲学化／思想化」することである」(468)と、締めくくる。

以上の内容紹介を踏まえて、以下では、評者の関心に照らして、まずは、本書の構えに関して、二つだけコメントしたい。序章「境界の攪乱へ向けて」において、人間と動物の分割線をめぐる人類学の動向の予備的考察がなされ、終章「境界は攪乱されたか——「静かな革命」をめぐって」で、革命、ANT、存在論という用語、多自然主義への「懐疑」

が順に表明され、検討が加えられている。しかし、評者には、これらの部分は、本書が、著者が一括りに呼ぶ「静かな革命」一派と一線を画しており、フィールドに深く入って思考するという態度を貫く研究であることを、きわめて対比的に強調することに留まっているように思われる。「懐疑」のみが持ち出されるだけで、問題の本質が見究められた上で、その乗り越えの手法が呈示されているわけではないのだと、評者には思われる。

ここでは、「静かな革命」以降に現れた、エドゥアルド・コーンの民族誌に照らして、考えてみたい [コーン 2015]。コーンの民族誌と本書は、動物の動きが豊かに描かれ、人間と動物の関わりに力が注がれている点で、似ている。

コーンは、生命が持つ記号論的性質に着目し、記号過程の産物である、諸々の「自己」が織りなす編み目を民族誌のなかに描きだしている。動物たちもまた自己であり、諸自己の生態学のあり方が取り上げられている。本書で、著者が「視界主義」と訳しているパースペクティヴィズムは、捕食—被捕食関係の編み目のなかで織りなされる、「他者への自己の主體的な視点の入れ替え」を重要な要素として含んでいる。とりわけ、ジャガーやライオンなどの強力な捕食者がいるアマゾンの森やアフリカの草原では、パースペクティヴィズムは、人間の生命にもダイレクトに関わる緊要な関心事なのである。本書で著者にも纏わりついている、人間と動物の二元論を超えようとするのであれば、ライオンや鳥が、どのように世界を見ているのかという課題を見過ごすことはできない。「人間にライオンの接近を知らせてくれるツォエン（キクスズメ）の声は、ゲムズボックが狩人の接近に気づくことをも助ける」（271）という報告は、ゲムズボックのパースペクティヴィズムに他ならない。要するに、本書は、そうした議論に縁つづきではなく、人間と動物の諸関係の編み目から垣間見える人間の情動に力点を置く民族誌なのである。

二つ目は、サブタイトルに掲げられている「感応と変身」についてである。すでに述べたように、著者は、第二章の〈ズィウ〉や、第三章の動物の匂いの影響によって女が死んだ事件などを取り上げて、感応に関しては、豊富なデータを交えて記述考察している。それに対して、終章で、著者は、動物と人間の関わりに滲透する影響関係を貫く家族的類似は、人間と動物のあいだ、あるいは人間と人間とのあいだの変身の可能性だと述べて、グイの民俗知のなかの変身の一例としてのオタマジャクシからカエルへの変身譚を紹介している。しかし、変身に裂かれた分量と内容は、感応に比して、圧倒的に少ない。

変身は、ヴィヴェイロス・デ・カストロもまた、人間と動物の問いを考える重要なトピックとして、服を着ることとの関わりで取り上げている。人間が動物の仮面をつけることは、動物の見かけの下に人間の本質を隠しているのではなく、異質な身体のを活性化させることに関わっている。つまり、何かを身につけて変身することは、たんなる偽装ではなく、動物そのものを深く規定する情動と力能を与えられることになる [Viveiros de Castro 1998: 482]。今後、グイの変身をめぐる民族誌の公表が待たれる。

ところで、冒頭に述べたように、本書には、文化人類学が動物を含めた課題に向き合うためのアイデアやヒントが散りばめられている。以下では、そのうちの3点について取り上げて、その問題点や可能性について考えてみたい。

第一に、虚環境や鳥の聞きなしとの関わりにおける記号過程のトピックに関して。虚環

境という概念は、目の前の風景のなかに獲物を探す身体・精神的経験をどう記述するのかを考える場合に、大きなヒントを与えてくれる。本書の虚環境は、神話的過去に結び付く傾向にあるが、他方で、〈足跡〉〈物陰〉〈音〉〈声〉〈匂い〉などもまた、直示できない虚環境だと言えよう。そうした指標記号を環境のうちに再構成して、直示的認知に及ぶことも可能であろう。著者は、知覚認知の現相は本源的に「表情的」だとした上で、身体の根源的な制度化として言語こそが大事だと述べている。しかし、評者には、言語化以前の、そうした「記号過程」もまた大事だと思われる。

第四章で、著者は、「カンムリショウノガンが鳴きながら飛ぶこと」と「獲物が入らない」ことの関係は、黒雲が降る雨を予示するのと同じくらい自明な結びつき、つまり、インデックス（指標）であると言う。鳥の振る舞いによって、人間は何かを知るのだ。それは、言語学者 C.S. パースの言う、記号過程にはかならない。鳥の聞きなしに関して、本書の指摘は示唆に富んでいる。グイが指標記号として、鳥の囀りを聞き、鳥が飛ぶのを見ていると捉えることによって、鳥の聞きなしをめぐる私たちの理解は一層深まるのではないだろうか。

第二に、本書が射程に収めている、現代人の動物をめぐる問題に関して。序章で、著者は、ピーター・シンガーの動物解放論、ギ・ド・モーパッサンの『女の一生』に登場する教条主義的神父、ジョン・クッツェーの朗読の中のコステロを取り上げて、動物をめぐる現代の課題にまで踏み込んでいる。動物と人間を結び付けたり切断したりすることが、人間どうしの分断を促す事態の考察は、私たち自身の周囲の動物殺しをめぐる問題を考えるときに、示唆に富んでいる。著者の問題提起を受けて、私たちの時代の動物をめぐる複雑な問題にどう切り込むかは、人間と動物に関わる人類学の、今後の重要な課題であるように思われる。

第三に、コミュニケーションに関して。著者は、コミュニケーション概念を用いながら、人間と動物の関係の具体的なあり方を解説しようとする。第二章では、動物へのコミュニケーション期待の投げかけが論じられる。評者の調査対象である、ボルネオ島のプナン人は、逆に、「動物の行動を見て笑う」ことが禁じられている。禁忌を破ると、天候が激変し、大雨が人びとを襲う。しかし、本書を読むと、コミュニケーション期待こそが、その禁忌の土台にあるのかもしれないと思われてくる。そうした禁忌の前提には、動物に対して過剰化するコミュニケーション期待があるのかもしれない。本書の議論は、プナン人の禁忌が、コミュニケーション期待がもたらす低い適応価を引き上げることになるのかもしれないと考えるヒントに満ちているように思われる。

第五章でもまた、婉曲話法が、コミュニケーション期待の枠内で検討されている。プナンもまた、婉曲話法を好む。猟に行って獲れた大きな獲物を小さな獲物である、たいしたことがなかったと言う。婉曲話法は、死者の名前を呼ばないこと、狩られた動物の名前を唱えないことにまで及んでいる。それらは一種の謙虚さの言表とも取れるが、本書を読んで、今後、コミュニケーション期待の点から再検討してみたいと思う。

グイの人々の日常の実践に喰らいつきながら書き起こされる微細な事実とそれをめぐってなされる哲学的な考察検討、さらに、ときおり織り交ぜられる個人的なエピソードが、

人間と動物をめぐる分厚いこの民族誌に深い陰翳を与えている [佐藤ほか編 2015]。本書が人間と動物の領域だけでなく、人類学に与える絶大なインパクトに蹠蹠たる歩みを呈しながらもやがて立ち上がり、今後、スガワラに続き、さらには、スガワラを超えていくような、人間と動物の民族誌を書かなければならないのだと思う。

<参考文献>

コーン、エドゥアルド 2015 『森は考える——人間的なるものを越えた人類学』奥野克巳・近藤宏監訳、近藤祉秋・二文字屋脩訳、亜紀書房。

佐藤知久・比嘉夏子・梶丸岳編 2015 『世界の手触り——フィールド哲学入門』ナカニシヤ出版。

Viveiros de Castro, Eduardo 1998 Cosmological Deixis and Amerindian Perspectivism. *The Journal of the Royal Anthropological Institute* n.s.4(3): 469–488.